Un roseau（アン ロゾ）

総合教育科目ガイドブック

No.17

タイトル“Un roseau（アン ロゾ）”
―― 一本の葦 ―― について

B.Pascal（1623－1662）は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
（ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリュ・フェーブル・ドゥ・ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロゾ・パンサン）

―― 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。――

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える（思考する、思想する）という行為によって有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、
その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだと。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

大学で学ぶということ

経済学研究科・教務担当部長　橋本　文彦

［自己紹介］

私は現在経済学部の教員ですが、経済学部の出身ではありませんし、実は「経済学」を体系的に学んだことすらありません。教員免許というものも持っていません。「えっ、そんな人が経済学部で教えていて良いの？」と思う方もいらっしゃるかも知れませんが、大学ではそのような経歴が認められています。みなさんの授業担当の先生方の経歴をよく見ると、現在の学部と異なる学部出身の方も少なくないことに気づくことでしょう。

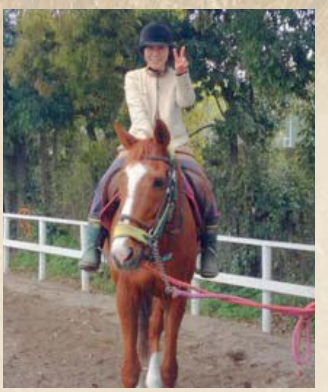
このように、大学教員は間違いなくそれぞれの分野の「専門家」でありながらも、その専門性を出身学部や資格など何らかの枠にはめた形で規定するのでは無い点に、まさに大学の教育・学びのあり方が現れていると私自身は感じています。

もともと私が大学・大学院で専門的に学んだのは、論理学と哲学です。

大学院卒業後、この大阪市立大学経済学部に着任する前には、専門学校で人工知能やC言語、UNIXの授業を担当していましたし、また現在も他の大学の文学部心理学科で心理統計の授業を担当しています。どうしてこのような事が可能なのでしょうか？

対話を通した学びを

生活科学研究科　三船　直子



馬術部で生まれて初めて乗馬

新入生の皆さん、ご入学、おめでとうございます。合格発表の日から今日まで、そしてこれからも当分の間、「おめでとう」のシャワーをたくさん浴びることでしょう。時には照れながら、また時には斜に構えて、「おめでとう」シャワーをどうぞいっぱいその身に浴びてください。これは、あなたが努力して得たことへの賞賛、そしてあなたをこれまで支えてこられた人たちへのお祝いだからです。そして、今から、ここから始まる日々の中で、避けがたくやってくる様々な困難や苦痛の数々が、これからの人生にとっての恵みとなりますようにと降り注ぐエールなのですから。そして在校学生の皆さんも桜花爛漫のこの季節になると「おめでとう」シャワーを浴びたあの頃を思い出すのではないでしょうか。この1年、この数年、どのような大学生活を過ごしてきたでしょうか。春は未来と過去が花吹雪のなかでやさしく出会う季節ですね。

青年期のこころを旅する

新入生のみなさんのこれから始まる大学生活は、これからのあなたを基礎づけていく体験そのものとなっていくでしょう。何を学び、どのように過ごすのか、そこには工夫され、周到に準備された情報

理系と文系

みなさんは大学入学までに、「文系か理系か」という二つの区分を当然のように考えてきたかも知れません。しかし、文系と理系は決して排反（＝両立しない）ではなく、また本質的な区分でもありません。

例えば、「理系は論理的な学問で、文系には論理学はあまり関係ないのでは？」と思うかも知れません。しかし、社会において主張の異なる他者と議論し理解し合う、というのは「文系的」ですが、そのためには互いの主張が前提とする「事実認識」「言葉の定義」「論理展開」のどの部分で主張が異なるのか、またさらに文化が違えば、「暗黙の前提」「言語体系」「価値観」のどこで相違が出たのかを専ら論理的に検討した上で、その対立点を明確にし、議論を進めていくことが不可欠です。

他方、理系は論理の飛躍を許さない学問に見えますが、科学理論はその理論が場所や時間が異なっても、「すべてのものに当てはまる」という一般性をもつ必要があります。ところがよく考えてみると、我々が観測できる事実はどう考えても有限で個別であるので、そこから「一般性を持つ理論」を導くにはどうしても演繹的では無く帰納的な論理を用いなくてはなりませんが、帰納論理はそもそもその正しさを証明することが出来ません。

つまり、科学理論の発見には必然的に「論理の飛躍」が必要になるのです。

上に述べたのは一つの例でしかありませんが、実際今や経済学の分野には「金融工学」や「脳神経経済学」などの分野が有り、数学科出身の人が目指す資格として「アクチュアリー（保険数理士）」があり、マーケティングには「行動心理学」が不可欠であり、社会学の基礎理論として「数理生物学」が活躍するなど、文系・理系を区分することの意味はどんどん薄れてきています。

外国語を学ぶ

私が大学の特に1・2年生の頃にかなりの時間を費やしたのは、語学です。なかでも「古代ギリシャ語」には相当な時間を費やしました。

大学では第一外国語として英語、第二外国語にドイツ語、第三外国語がフランス語で第四外国語が古代ギリシャ語、第五外国語にラテン語を履修・修得しました。どちらかというと勉強することが嫌いではないはずの私も、ギリシャ語の授業の前日には「もう予習するのをやめて、履修放棄しようかな」と毎週のように考えたことを（もう、30年も経ちますが）今でも思い出します。というのも、ギリシャ語の授業は毎週小テストがあり、一度でも満点以外の点数を取ると、その場で「退場」が宣告され、「単位はいらないので授業だけ出たい」という学生も「満点が取れないと言うことはやる気が無いと言うこと。やる気が無い人は授業の邪魔」として出席を拒否されるというほどだったからです。2年間何とか脱落せずに無事に単位をもらいましたが、最後の授業での先生の言葉は「この程度ではまだまだ入門ですから、原文はきちんと読めませんよ」でした。

これに奮起して（うまく乗せられて？）、結局卒業までの更に2年間、ギリシャ語を勉強する羽目になってしまいました（後半の2年間はさらに厳しい授業でしたが、それはまた改めて）。

外国語を勉強することは、単にその言があふれていることでしょう。しかし、その中には「私仕様」のマニュアルも手引書もまだありません。情報は受け手のイマジネーションをとおして、血肉となり、その人の体験へとなっていきます。情報を選択し、自らのイマジネーションを通して初めて、どの道をどのように進んでいくかをあなたは決めることができ、それこそがわたし独自の体験となっていくのではないかと思います。こうして〈いま・ここ〉で行き交う人々との出会いを生きていく旅が始まっていくのです。いえ、もう始まっているのでしょう。ここでの出会いはもちろん人に限るものではありません。新たな生活、いままでとは違う時の流れ、この街、この喧噪、この静謐さ。これまで存在さえ知らなかった新しい知識、生涯の研究テーマ。そして数限りない驚きと喜び、時には耐え難い後悔の思いや消してしまいたいような悲しい体験とも出会うかもしれません。その時々にあなたはあなたの旅を切り開いていくのです。

カウンセリングの旅

私の専門は臨床心理学です。そのなかでも心理臨床学という分野で、カウンセリングや心理療法と呼ばれる心理的な対人援助の実践とその基礎的な研究を行っています。さまざまな理由で生じた心身のちょっとした不調から苦痛や混乱まで、また、そのために日常生活に困難をかかえるに至る場合や発達の課題や適応の問題を抱えている乳幼児から大人まで、そのこころに寄り添い、心理的支援を実践しています。

このプロセスはたとえば、旅としてイメージできるでしょう。その旅を二人でつぶさに体験し、こころに刻み（記録し）、共有していく。その旅は遠回りして、非効率的で、丁寧で、ゆるりと行きつ戻りつしながら、思い浮かぶことや思い出したこと、心に浮かぶよしなしごとを語らいつつ進んでいきます。旅の途中では泣いたり、笑ったり、怒ったり、時に厳しい時期を経ていかなければならないこともあります。気持ちがおさまらず、それは例えば、深山のけもの道をお互いの足音だけを頼りに歩くような、手探りのつらい時期もあります。しかしこれこそが、「急がば回れ」の実践と踏ん張り、一人ひとりのオリジナルな旅路を共に歩んでいきます。

旅の終点は、予想もしなかったところにたどり着くことがあります。しかしそれはたどり着いたときには納得のいく場所のようです。「ああ、ここにたどり着くために旅してきたのだ」というところに着いて私たちの旅は一応終わります。

さて、カウンセリングで対話を重ねていくことにより、どのようにして人のこころは「癒され」ていくのでしょうか、そのこころの働きはどのようなものなのでしょうか、そしてその関係の中で「わたし」はどのように形成されていくのでしょうか。これらの問いについて、私は「共にいること／関係性」「感じること／共感」「思いめぐらすこと／イマジネーション」をキーワードに実践という旅を通して、教えられ、考えてきました。聴くこと、話すこと、対話を重ねること、人のこころの働きの不思議さ、関係が作り出す出会いの奥深さに驚きながらこの旅は続いていきます。

対話すること

「君と一夕相語るは、十年書を読むに勝る」『酔古堂剣掃』という中国古代からの名言を収集した書物の中にある一節です。どれほどの本を読めども、君と胸襟を開

語を学ぶと言うことにとどまらず、その時代や文化を理解することにつながることはもはや言うまでもありませんが、同じ人間の思考が如何に異なるかと言うこと、また逆にそれでも共通する点が数多くあると言うことを学ぶことが出来ます。

上記二つの、論理学・数学と語学、これに加えて幅広い知識があれば、その後はどのような専門分野であっても、その後に修得することは容易です。

最初から専門分野のみを学ぶことは、一見効率が良いように見えますが、将来その分野が広がりを見せたときに対応出来なくなる可能性があります。実際、40年前にもてはやされた分野が現在どうなっているかを見ることは、皆さんが大学卒業後定年までにどれほどの変化への対応が要求されるかを推定する目安になるかと思います。

「効率的ということ」

上で述べたように、大学での学びでは、一見効率が良いだけの学習をするのではなく将来の変化への対応力を養うという長期的な視野での効率が必要ですが、さらに効率で測定できない、むしろ効率の悪い学びが本当は重要です。

大学に入ったばかりの方への文章の中ではあまり適切ではないかも知れませんが、ギリシャ悲劇作家・ソフォクレスという人の「コロノスのオイディプス」という作品の中で、コロス（合唱団）が次のように歌います。「人間は生まれてこないのが一番幸せ。でも生まれてきたからには出来るだけ早く大地に戻るのが次の幸せ」。

もちろん、これは人生のあまりのつらさを語る本音であると共に、当時絶頂期だったアテネの人たちの「幸せ」についての逆説的な表現でもあります。

この「幸せ」はむしろ「効率的」と置き換えると、私たちの本当の幸せは、努力してしかし必ずしも報われず、それでも生きていく、その中でほんの少し人生が輝く瞬間がある。そこにこそ幸せの価値を認めることが出来ると読めます（さすがに、ちょっと強引ですが）。

それは大学にも当てはまります。「大学には入学しないで働く方が効率的」、「入学したなら、出来るだけ簡単に単位を揃えてさっさと卒業するのが効率的」。そう、効率的かも知れません。しかし、あえて大学に入学したみなさんは既に大学生活が「効率だけのためではない」ことを承知しているはずです。大学では、おおいに無駄な遊びをし、無駄な勉強をし、無駄な努力をしてください。しかもそれらは必ずしも将来の何らかの利益に直結するわけでも無いけれど、大学でみなさんの人生が輝くその瞬間を与えてくれます。受験勉強は、大学合格という直結した目標を達成した時点で、その努力の役割を終えますが、大学での、目先の利益に直結しない無駄な勉強は、みなさんの人生を彩ることでしょう。

橋本　文彦（はしもと ふみひこ）

1963年　生まれ
1990年　大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了（哲学専攻）
博士（経済学）
現在、経済学研究科　教授
専攻分野／行動情報論
全学共通教育の担当科目／「社会科学のフロンティア」

いて、じっくりと語り合うことの深さは何者にも勝る、得がたいものであり、私たちを新たな世界へといざなってくれるものと思います。それは自分自身の内側にある自分では想像もしなかった「自分」と出会う体験です。そして語り合う友も、友の内に眠っていた新たなその人自身と出会い、私たちはお互いに、照らしあい、お互いの間でこそ見出すことのできる「自分」と出会っていくことになるのです。

この体験をさかのぼっていくと、ウィニコットという小児科医で後に精神分析家となった人が語った「赤ん坊が母親の顔に見るのは自分自身の顔である」に至ります。養育者のまなざしの中に私たちは自分自身の存在の始まりを発見するのです。あなたのまなざしに映し出されて私は存在するのです。近年、人間関係が希薄になり、浅くて広いかかわりと言われて久しいですが、その代表のように言われているSNSでの関係の中からも、心の底から語り合える、お互いを照らし出しあえるそういう友との出会いがうまれてくるかもしれません。

一方、対照的にストーという心理臨床家は「孤独」の意味を探求し、孤独であることの重要性を「自己との対話」として見出しています。「自己との対話」とは自らの中にある「他者」との対話と言い換えることができます。すなわち、自分の中の「他者」とは先ほどの友人との語らいのなかで取り上げた「未だ自分の知らない自分」のことです。知らなかったことを知り、既知となったことの向こう側へと進んで行く、これこそが「学び」のことのようにも思います。

対話する学び

さまざまにあるどのような分野でも、私たちは研究対象となる月や星や、鉱物や歴史や、ありとあらゆる事象と対話を重ね、既知の向こう側への旅をしていると言えるのではないでしょうか。知人の病理医が「顕微鏡で細胞と話をしていると向こうから、がん細胞が呼びかけてくるとしか言いようがない」と話してくれたことを思い出します。今もラボではたくさんの対話が顕微鏡を通してなされていることでしょう。対話を通して、イマジネーションを働かせて体験し、世界の中に私を見つけ、世界を私の中に見つけ、それを発見した新しい自分と出会い、多様なものが私たちの中にあることを知り、驚くのです。学びの旅はすでに始まっています、このキャンパスから、いま、ここから。声になる声にならない豊かな対話をどうぞ重ねられますように。

結びにかえて詩の一節を記します。きっとどこかで聞いたことのある一節ではないかと思いますが・・・、みなさんに贈ります。

限りあるかなたを見つめながら
未だ来ないものを人は待ちながら創っていく
誰も君に未来を贈ることはできない
何故なら君が未来だからだ
（谷川俊太郎「未来」）

三船　直子（みふね なおこ）

1994年、大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程修了、博士（学術）
現在、生活科学研究科総合福祉・心理臨床科学講座、臨床心理学コース教授
専攻分野／心理臨床学
保健管理センター カウンセリングルーム室長
全学共通教育の担当科目／「都市生活と人間福祉」「現代社会と健康」にてゲートキーパー研修担当（2回）